事例に基づく砂場遊びの分類

－幼稚園における幼児理解の一提案－

山﨑　幹子（壱岐幼稚園）[1)] 圓入　智仁（教育学部）[2)]

Classification of Sandbox Play

-A Proposal for Understanding Children in Kindergarten-

Ⅰ．はじめに

砂場遊びとは、乳幼児期に多く行われる遊びの一つであり、その時期にあらゆる砂場遊びの経験を積むことで、生活の基礎となる行動を理解し、発想の転換が豊かになるなどの重要性を秘めている。

筆者は保育の現場で子どもの遊びの様子を観察する中で、どの遊びも意味があり子どもが考え、それぞれが成長するために必要な経験を積んでいることが分かる場面を見てきた。しかし、その経験がどのような学びに繋がっているのか、具体的に考える時間や余裕がなく、ただ漠然と「遊びは子どもにとって大切なものである」としか考えていなかった。保育の現場では、遊びが大切であるということは理解しているが、具体的にどのように子どもの成長に繋がっているのかまでは、探求することができないままになっていた。先行研究において「砂にかかわる幼児の遊びの構造とその理解」（粕谷　2007）では、保育者の遊びに対する解釈の特徴を、「砂にかかわる幼児の遊びにおいて、どのように砂とかかわり、どのようなイメージを持ち、そして仲間とどのようなやり取りがなされて遊びが展開しているのかなど、具体的な遊びの経過については把握されていないのである。（中略）砂にかかわる幼児の遊びについて理解するためには、砂自体の特性とそれに応じた幼児のかかわりを考慮した遊びの構造について考察していくことが必要であることが分かる。」とあり、遊びに対する保育者の的確な理解の重要性を、述べている。

「幼稚園における遊びの再考－『砂遊び』の解釈学的アプローチ（Ⅲ）－」（福西　2005）では、「砂場は、園庭の大地がその堅さ故にその下への侵入を拒むのに対して、内部への侵入を子どもに許す。（中略）我々は、その活動を『山づくり』『池、川、ダムづくり』などと総称し、その行動や展開の過程を記述して、そこに協調性、社会性、創造性、想像力、感触、などといった価値を付与することで、そこに砂遊びの教育的意義があると位置づけてきたのである。」とあり、さらに人間的な成長に向けて、具体的にどのような意味があるのかを探求する必要があると述べている。

また、Caillois・Rの『遊びと人間』(1990)の中で、定義として「人は遊びたければ、遊びたいときに遊びたいだけ遊ぶ。この意味で遊びは自由な活動である。それはさらに、不確定な活動でもある。最後がどうなるか、ぎりぎりまで分かってはいけない。」と述べている。そこから、砂場の中での遊びは自由であり、子どもが答えを出して遊んでいるというよりも、遊びの過程で変化させたり、その変化を楽しんだりすることで、砂場遊びが様々な遊びに発展することが分かる。

そこで本研究では、子どもの遊びの中でも砂場遊びに着目し、その分類を踏まえて遊びの目的や意味について考察する。そのことにより、幼稚園における幼児理解の視点の提供を目指したい。

Ⅱ.方法

１．観察方法

Ｎ大学付属Ｉ幼稚園の園庭に設置されている砂場の中で繰り広げられる遊びの観察を、以下の通り行った。令和２年７月から 10 月までののべ 39 日間、朝の好きな遊びの時間（およそ 9 時 30 分～11 時）の中での様子を、ビデオカメラ２台（定点撮影と観察者手持ち撮影）で観察した内容を記録した。撮影中は子どもの砂遊びに集中する姿を撮影するために、妨げにならないよう留意した。

執筆者紹介：[1)] 壱岐幼稚園　[2)] 中村学園大学教育学部
別刷請求先：山﨑幹子，　〒819-0043　福岡市西区野方 2-14-43，ikiyamasaki @nakamura-u.ac.jp

２．分析方法

Ｉ幼稚園における砂場遊びの様々な種類を筆者なりに分類して、概観する。

①ダイナミックな遊び

「ダイナミックな遊び」とは、砂場遊びにおいて子どもが体全体を使って立ったり、座ったり、寝転がったりしながら遊ぶことと、「山作り」や「穴掘り」、「川作り」や「トンネル作り」など、砂場で大掛かりなものを製作して遊ぶことなど、2 つの意味を持つことと定義し、具体的な内容を、以下で説明する。

砂場遊びの中で、「山作り」は頻繁に発生する遊びの 1 つである。子どもが砂場の砂を、手やスコップなどを使ってすくう行為が始まれば、自ずと、山を作る遊びになる。すくった砂を上に積み重ねることで、山ができる。同じ場所を下に向かってすくうことで、穴ができる。同じ動作であるが、上に積み重ねることと、下に掘っていくことと、遊びに違いがある。

「山作り」に派生する遊びとして、作った山の側面に穴をあけ、トンネルを貫通することがある。この遊びは、作った山の状態によって、成功したり、成功しなかったりする。それは、山の大きさや硬さに依存するからである。

また、「山作り」は経験を積み重ねることで、上手にできるようになる。幼稚園の年少組の子ども達は、山作りの経験が少ないためか、砂をすくって積み重ねる際に、山の側面を固めることをしない。そのため、そのまま「トンネル作り」をしてもすぐに崩れてしまう。「山作り」の経験を積み重ねたり、保育者からトンネルの作り方についてヒントをもらったりすることで、「山作り」から「トンネル作り」までが、少しずつ成功するようになる。

「トンネル作り」をすると、その中に水を流す遊びへと展開する。あるいは、「穴掘り」をすると、その穴に水を流し入れる遊びに発展する。砂場遊びにおいて、水を使った遊びは発展的なものと位置付けることができる。

「川作り」は、トンネルに水を流す遊び、あるいは「穴掘り」で掘った穴から水の流れる道として、川を作る遊びである。水を流す行為が必ずあり、水をバケツなどに汲んで、あるいは、水道から砂場までホースをつなげて、川やトンネルに水を流す。その際、川の作りや水の量で、流れ方に違いがある。

「ダム作り」は、「穴掘り」や「川作り」から発生することが多い。水を流す行為で堰き止めたり、流したりすることで、ダムの仕組みを考えながら遊ぶことができる。

「道作り」や「町作り」は、「川作り」と似ている。大抵は複数名でスコップなどを使って、浅く長く横や斜めに掘り、その道をつなげることで迷路のような道を作る。その道が山などを囲み、町を作る遊びに発展する。「道作り」や「町作り」が発生すると、川やダム、そしてトンネルを作る遊びにつながることもある。

②ままごと系の遊び

ままごと系の遊びを、ここでは砂を使って食べ物を作ったり、その食べ物を利用してごっこ遊びや見立て遊びをしたりすることと定義する。以下、「おうちごっこ」や「お母さんごっこ」、「ケーキ作り」や「ご飯作り」、「味噌汁作り」や「アイスクリーム作り」などについて述べたい。

「ままごと遊び」は、子どもの遊びにおいて室内外のあらゆる場所で、頻繁に発生する遊びである。砂場遊びの中でも度々見られる遊びで、種類としては、「おうちごっこ」や「お母さんごっこ」などがある。「おうちごっこ」と「お母さんごっこ」は、ほぼ同様の内容になるが、遊ぶ子どもによって、呼び名に違いがあるようである。砂場遊びにおいて、「おうちごっこ」では砂場を家の中に見立てることが多く、そこで遊びを繰り広げていく。家族の役割を決め、なりきって遊んだり、料理を作ったりする。「お母さんごっこ」では、お母さん役の子どもが中心になって遊びを仕切るため、「お母さんごっこ」という呼び名になると考えられる。

砂場遊びでは、砂を食べ物に見立てる遊びとして、「ケーキ作り」、「ご飯作り」、「味噌汁作り」「アイスクリーム作り」などが頻繁に観察できる。「ケーキ作り」は、お椀やボウル、ふるいやバケツなどを利用して、それらの中に砂を詰め込み、ひっくり返すことで半球形や円柱型のケーキを作る遊びである。そこに白砂をふるいにかけて、「さとう」に見立てることもある。この半球形や円柱型のケーキを作ることは、砂場遊びの経験を積まなければ難しい。ただ砂を容器に入れるだけではできず、砂の状態をよく見て、固まりやすい湿り気のある砂を容器に入れ、その際、何度か押さえて詰め込まないといけない。そうしなければ、ひっくり返した時に、崩れてしまう。砂場遊びの経験を積む中で、砂の状態を確認したり、作り方を工夫したりして、子どもの作りたいものができる。

砂の状態を考えながら遊ぶことには、型抜き遊びも含められる。食べ物の形の型抜きに砂を詰め込む際、工夫すると綺麗な形になり、ままごとなどの食べ物として遊びに取り入れることができる。

「ご飯作り」、「味噌汁作り」、「アイスクリーム作り」などは、砂を材料にして具体的なものを作る遊びである。お椀の中に砂を入れてご飯に見立てて、食べる真似をする遊びや、その中に水を入れて、泥水にしたものを味噌汁に見立てたり、アイスクリームカップに砂を盛り付け、それとして見立てたりすることで、食べ物を作る遊びが発展し、盛り上がっていくことになる。

③砂や泥そのものの遊び

砂や泥そのものの遊びとは、ここでは、砂本来の特徴を砂場遊びに利用して遊ぶことと定義する。砂と水を調合してその過程を楽しんだり、砂のサラサラした状態を、遊びに使ったりして遊ぶことを含めている。具体的には、「泥作り」や「泥んこ遊び」、あるいは「泥団子作り」などがある。何かを「埋める遊び」や、「サラサラ砂作り」、「貝殻集め」についても、ここに含めておく。

バケツや容器に砂を入れ、そこへじょうろや水入れの容器を使って水を入れると、泥ができる。砂と水が泥になったり、水分の多い砂に変化したりすることで、泥をこねたり、固めて泥団子を作ったりして遊ぶ。あるいは、砂と水を交互に何度も入れることで、固めたり、どろどろにしたりして、変化する砂の様子を楽しみにしながら遊ぶことができる。

砂場では、砂の中におもちゃを埋めたり、自分や友達の足や手を埋めたりと、砂の中に何かを埋める遊びもある。おもちゃを埋めることで、宝探しごっこが始まる。手や足を埋める行為では、砂の気持ち良さを感じることができる。砂場の下層の砂は湿気を含んでいることが多く、冷たくひんやりしている。また、友達と一緒に自分の足を埋める競争をすることも、埋める遊びをさらに楽しくしている。

砂が乾燥していれば、表面がサラサラしているので、スコップや漏斗型のおもちゃを使って、振りまく遊びをすることもある。また、砂場の砂には小石や貝殻が混じっているため、砂をふるいでふるうと、サラサラの砂が落ち、ふるいには、貝殻や小石が残っている。

このサラサラの砂を「ゆき」にして、①の「山作り」などに使ったり、それらをケーキの上に「さとう」としてかけたり、味噌汁作りの「しお」などに見立てることもある。あるいは、貝殻を集めて形や色を楽しんだり、貝殻や小石を①の「山作り」や、②の「ケーキ作り」などの飾りとして利用したりしている。

３．事例検討と考察

以下では、「２．分析方法」に沿って分類した順に、遊びの事例とその内容を具体的に考察し、その意味や内容を検討していく。

子どもの遊びは「①ダイナミックな遊び」、「②ままごと系の遊び」、「③砂や泥そのものの遊び」の３つに分類できるものではなく、それぞれの要素が混在していることも事実である。ただ本研究では、砂場遊びの分類の提案を目的としているので、各事例の主要な要素に着目して分類する。

表記している事例の順番は、遊びの内容の順に示しているため、時系列にはなっていない。なお、事例の中では、砂場で遊ぶ子どもの表記を、男女別（男児は〇男、女児は〇子）にアルファベットで分け表記している。事例中の下線は、子どもの際立った行動や言葉が出現した部分に記している。また、事例を区切っている点線はその日の遊びを細かく分け、部分ごとに表記しているためである。

①ダイナミックな遊び

表①－1　「川作り」「ダム作り」

<7 月 15 日(水)曇り>

事　例
Ａ男（年長男児）が「とんねるつくろう、じゃあ、だむってどう？」と次々にＢ男に対して、提案している①。Ｂ男（年中男児）も「それはいいね」と賛同しつつ、Ｔ型のスコップで斜面を削っている。Ａ男が「だむってね、ここにみずをためて、どらいやーみたいにみずをはしらせるの」と言い②、Ｂ男も賛同していた。
Ｂ男はアイスクリームのコーン型のおもちゃで、違う方向から長い川を作り、Ａ男の言う折り返し地点まで届き、さらに、水を入れていた穴までつなげる③。Ａ男が穴を「だむにつながって…」と穴をダムに見立てていた。
Ａ男はアイスクリームのコーン型のおもちゃに、水を入れ、漏斗型のおもちゃに流して「いいね、でた」と水の流れる様子を確認していた④。
Ｃ男（年長男児）が流れた水を長く流そうと、スコップで川を掘り進める⑤。
その横で、ダムの淵をＣ男が足で「どかくずれ」と言いながら壊していると、Ａ男が替わり「どしゃくずれ、いくよ」と言いながら、足で壊していた⑥。 年長組、片付けの時間になり終わるが、他の場所でもＤ男（年長男児）とＥ男（年長男児）とＦ男（年中男児）とＧ男（年中男児）とＢ男が漏斗型のおもちゃを設置して、水を流す遊びをしていた⑦。

表①－1 の事例では、「川作り」から「ダム作り」へ発展したり、「川遊び」を面白くするために、おもちゃを使って仕掛けを設置したりすることで、遊びを変化させながら工夫していることが確認できる。

①では異学年同士であるが、Ａ男もＢ男も、よく言葉が出る子どもであるため、言葉でのやり取りが多いと思われる。②からＡ男はダムの構造を理解していることが伺える。一緒に遊ぶ友達に言葉で説明しながら、ダムを作ろうとしている。周りの友達もＡ男の指示通りに動いたり、ダムを想像しながら自分で考えて川を掘ったり、水を流したりしている。③では別の遊びに行ったのではなく、Ｂ男なりに考えて、遊びを進めていたことが分かる。④は水が流れることを予想して、漏斗型のおもちゃを設置していたのは、以前に経験していたからだろう。⑤では水の流れを見て、もっと先

まで川を流したいという思いで、川を掘り進めていたようである。川やダムに水を流して、その流れを観察し、自分たちでイメージした水の流れになるように、試行錯誤をしながら遊んでいる。⑥のC男が発した言葉が、意図的に間違ったのかは不明であるが、A男がそれを受け止め、行動と言葉を結び付けて、自分なりの言葉で表現することから、語彙力が高いと考えられる。⑦では自分の近くで、興味のある遊びをしていたことを模倣し、自分なりの遊び方で遊んでいる様子が見られた。

砂場での遊びは、砂の状態を変えたり、おもちゃで工夫したりすることで、遊びに発展が見られる。その発展をイメージしながら、遊びを変化させることができる。

表①－2「川作り」
<7 月 16 日(木)曇りのち雨>

事　例
A男（年長男児）はT字のスコップを持ってきて、川の幅を広く掘り出す⑧。A子（年長女児）もスコップで周りを掘っている。D男（年長男児）は手で掘っている。

表①－2 の表について、⑧は、川を幅広く掘るには、道具を工夫する必要があり、T字のスコップを使い川の幅を広くするという発想に至ったことが分かる。

砂場でダイナミックに川を作る中で、友達とのかかわりを深めたり、砂の変化する状態を発見し、遊びに取り入れたりすることで、砂場遊びの楽しさを味わい、心身共に充実した時間を過ごすことができている。また、どの事例においても、砂場での「山作り」などの遊びには、比較的、長い時間をかけていることが多い。

表①－3「穴掘り」
<7 月 1 日(水)晴れ時々曇り>

事　例
D男（年長男児）がじょうろに水を入れてきて、掘った穴に入れ泥になった砂をすくって、防波堤のように周りを固めている⑨。時折、保育者に声を掛けに行こうとしている。

表①－4「落とし穴」、「穴掘り」
<7 月 16 日(木)曇りのち雨>

事　例
H男（年中男児）は2本のスコップを使って「ばくり、ばくばく」と言いながら、2本で砂を挟んですくっている。「みて、たべた」と友達に見せている。I男（年中男児）もスコップを2本持って来て、真似をして砂を挟んですくっている⑩。

表①－3 の⑨では、穴の周りを固める動作は、「穴掘り」の際に、頻繁に観察できる。穴の中に水を流し、その底に溜まった泥をすくい出して、周りを固めていることから、水と混じった砂は泥になり、固まる性質ということを理解していると思われる。砂を泥作りだけでなく、穴の強化のためのコンクリートのような役割として使っている。

表①－4 の⑩では、2 本のスコップで砂をすくうことを、「食べる」という行為に見立て、このような言葉を発し「穴掘り」をしている。その中で、I 男に伝わりお互いに楽しみながら「穴掘り」をしていたことが分かる。

砂場での「穴掘り」は、「山作り」同様、長い時間をかけて、砂の状態の変化に気付き、その砂の状態を活用することで、発展する遊びである。また、子ども達がスコップなどを使って、砂場に穴を掘ったり、その穴に水を流し込んだりして、砂場の状態を観察しながら遊ぶことも多い。その中で、砂場遊びを通して子ども同士の関わりが変化したり、広がったりすることで、子ども達が友達と関わる方法を身に付けている。

②ままごと系の遊び
表②－1「ボウル型の型抜き」
<7 月 2 日(木)晴れ>

事　例
B男（年中男児）は大きなボウルに砂を手ですくって入れている。撮影者が「何をしているの？」と、聞くと「わかんないけど、かいがらすな」と答え、ボウルをひっくり返して「いくよ、はずすよ」と言って、ボウルを取ると、きれいなボウル型の型抜きができる。そして、すぐに「いくよ」と言って、そのボウル型の砂の上に飛び乗って崩す。その後また同じように砂を入れて、ひっくり返したが、きれいな形にはならなかった⑪。「いすみたいなかたち」と言って、また上に飛び乗り崩す。

子どもは砂場遊びにおいて、本来の型抜きのおもちゃ以外でも、「型抜き遊び」をすることがある。例えば、表②－1 の⑪のように、ままごと道具のボウル（本物の台所用品であり、子どもにとっては大きいサイズ）に、たくさんの砂を入れ、砂の詰まったボウルをひっくり返す。これは、とても難しい動作である。B男は一度成功したことで、達成感や楽しさを感じ、再度挑戦している。型抜きでできたボウル型の砂山に、飛び乗って崩すという行為も、砂という素材だからこそできることである。「つくって、こわす」楽しさや、解放感を味わっている。

表②－2　「食べ物の型抜き」
<7 月 9 日(木)曇り>

事　例
Ｊ男（年少男児）はボウルの中一杯に砂を入れている。おもちゃの所に行きオレンジの型抜きを持ってきて、砂を入れて型抜きをするが固まらない⑫。
Ｂ子（年少女児）がコップで作った型抜きを、撮影者に見せる、「みて、ぷりん」と言い、きれいなカップ型の型抜きができる。2 つ目を作ったが、壊れる⑬。

表②－2 は、どちらも年少組の子どもである。⑫では型抜きに失敗しており、まだ砂が固まるにはどのような状態の砂か見極めることが難しいようである。反対に⑬では型抜きに成功している。1 つ目の型抜きが上手にできると、次も作りたいという意欲に繋がり、上手に作るにはどのようにすれば良いか、繰り返し工夫するようになっていることが分かる。

「型抜き遊び」は、砂の選別から砂の入れ方、そしてひっくり返す時の方法という、一連の行為の 1 つ 1 つを工夫にすることで成功する遊びであり、遊びの経験の有無が、影響していると考えられる。型抜きを成功した子どもは、周りの友達や保育者にできたことを知らせに来ることが多く、成功した喜びを感じている。

他方、失敗の繰り返しを積み重ねる過程で、上で述べた砂の型抜きの方法を何度も経験し、砂の性質や変化を知り、探求心が芽生え、砂場遊びをさらに楽しくしたいという欲求が生まれてくる。

表②－3「山作りに型抜き」
<7 月 21 日(火)曇り時々晴れ時々雨>

事　例
Ｃ子（年中女児）とＤ子（年中女児）が山を作って、その上や側面に型抜きをのせている⑭。

表②－3 の⑭は、大人が想像できないような遊び方であろう。山の上や側面に、食べ物の型抜きを配置して山を飾っている。「山作り」と「型抜き遊び」が合体したものである。山作りに型抜きを合体して山を飾るという発想が、豊かであることが分かる。

この事例から、子どもは環境を自在に利用して遊ぶことができると確認できる。

表②－4「料理作り」
<7 月 1 日(水)晴れ時々曇り>

事　例
ベンチの所でＥ子（年長女児）とＦ子（年長女児）が、料理を作っている。ボウルや鍋を使って、砂を入れたり出したり混ぜたりしている⑮。
ベンチではＧ子（年長女児）も入って、料理を作っている⑯。砂をアイスクリームのコーン型のおもちゃや、お皿やお椀に入れている。

砂場では、子どもが日常生活の模倣として、砂を材料にした「ままごと遊び」をする姿が、多く見られる。

表②－4 において、年長組の子ども達は、本当に料理を作っているような動きをする。⑮では、鍋の使い方が上手で、片手鍋の取っ手を持ち、手首のスナップを効かせながら、鍋に入った砂を食べ物に見立てて振ったり、時折混ぜたりして遊んでいる様子は家庭の様子の模倣だろう。また、⑯ではＧ子が後から参加して、同じように料理を作ったり、砂を盛り付けたりしている。友達が料理を作っている姿を見て、模倣したいと思い加わったようである。料理の作り方も、子ども達それぞれ違っており、アイスクリーム作りなど、自分でできる料理の作り方をして遊びを楽しんだり、友達の姿を見て、その遊び方を模倣したりして、「ままごと遊び」が発展している。

表②－5「おうちごっこ」
<7 月 2 日(木)晴れ>

事　例
Ｈ子（年中女児）とＩ子（年中女児）とＪ子（年中女児）で、おうちごっこをする。Ｈ子がお母さん、Ｊ子がお姉さん、Ｉ子が子どもと、Ｈ子が決めている⑰。それぞれボウルの中に砂を入れたり、飲み物の容器に入れたり、取っ手付きのふるいで砂をふるったりしている。Ｉ子が子どもの役らしく、Ｈ子に対して「おかあさん、おはなばたけってなあに？」と質問し、Ｈ子は「おはながいっぱいあるところだよ」と答える。会話の中で、お弁当を持ってお花畑に行こうと話していたようである。そのためのお弁当作りをしている⑱。途中、暑くなり日陰の所におもちゃを持って移動する。Ｊ子が小さなおもちゃを全部、運んでいた。
Ｊ子は「かいがらあつめする」と言って、貝殻を拾いに行き、Ｉ子も行く。 Ｈ子は飲み物の容器に入れた砂を、少しずつバケツに入れては泡だて器で混ぜている⑲。

表②－5 は、「おうちごっこ」において、花畑に行くためのお弁当作りをしている場面である。⑰と⑱は言葉による伝え合いで、子ども同士の関わりが広がっている。3 人それぞれが思い思いに砂を使って、お弁当作りをする中でお互いに役割を伝え合いながら、共通の遊びをしていることが分かる。特に、Ｈ子はこの遊びを進めており、作っている時はお母さん役だった。言葉のやり取りで家族の役割が決まり、3 人がそれぞ

れ、砂を使ってお弁当を作っていた。これらのことから、日頃から一緒に遊ぶことが多い、仲の良い関係であると考えることができる。⑲は、材料の砂を少しずつ入れながら、料理を作っている場面である。砂と水を合わせて、泡だて器を使って遊ぶことで、ごっこ遊びへと展開している。

実際の生活における観察や経験を、遊びの中で再現することで、家族の役割などを自ら、経験している。加えて、他の友達の家族の役割も学ぶことにもなる。

表②－6「ごはんやさん」
<7月3日（金）曇り時々雨>

事　例
Ｂ子（年少女児）がバケツに砂を入れて、ベンチで、「Ｂ子ちゃん、ごはんやさん」と言う。Ｋ男（年少男児）がベンチに座って、「ごはんください」と言う。Ｋ子（年少女児）もお椀に砂を入れて、その上に貝殻を入れご飯を作っている⑳。
Ｋ子は「とっぴんぐごはん」と言って、貝殻を乗せている㉑。 片付けの時間になる。

表②－6 は、年少組の子ども達の様子である。⑳では、子ども同士のやり取りが見られる。Ｂ子もＫ男も言葉がしっかり出る子どものため、ごっこ遊びを通してこのようなやり取りが生まれたと考えられる。Ｋ子は、そのやり取りには入っていないが、ごはん屋さんという砂を使った遊びを一緒にしているつもりで、㉑のように自分のしたい砂遊びをして、砂に貝殻を入れた物を「とっぴんぐごはん」と表現したようである。なお、Ｋ子は、言葉の表現力が豊かな子どもである。

砂場遊びでの「ままごと遊び」は、以上の事例から、女の子が多いと言える。特に、砂を食べ物などの材料に見立て、料理をする場面が顕著である。このことから、女の子の方が「ままごと遊び」に関して家庭での生活を模倣したり、再現したりして、楽しく遊ぶことができるのであろう。

表②－7「砂を色々なものにふるう」
<7月1日(水)晴れ時々曇り>

事　例
Ｆ男（年中男児）はふるいに砂を山盛り入れ、ふるおうとしたが、ふるえなかったため、2回砂を減らしてから、ふるっている㉒。 Ｇ男（年中男児）も同じふるいを持ってきて砂をふるっている。そして、2人でお互いに入れ合いっこしたり、ボウルにふるったりしている。 Ｆ男はよくふるえるように、ふるいの横の部分を手でたたいている㉒。

表②－8「ふるい遊び」
<7月9日（木）曇り>

事　例
Ｊ男はふるいにたくさんの砂を入れて、ふるっているが、あふれ出している㉓。

表②－7 の㉒は、たくさんの砂をふるいに入れたことで砂が詰まり、ふるえなかったが、砂の量を減らすことで、ふるえるようになった事例である。ふるいを使う時の特徴を、使いながら理解していることが分かる。また、表②－8 の㉓では、砂の量を多く入れたことで、上手にふるえず、その状況を改善できていない。これらの差は、ふるいを使った遊びの経験の違いの有無が、影響していると考えられる。何度も砂をふるうことで、どのような砂を、どの位の量入れることが最適であるか、理解することができるのであろう。

Ｉ幼稚園には、丸形や取っ手付きのふるいが、砂場のおもちゃとしてある。そのふるいは、砂を粒子の細かい砂と粗い砂とに分ける時に使うことが多い。ふるい方にも、経験が左右しているようである。

表②－9「泥団子作りのための砂ふるい」
<7月15日(水)曇り>

事　例
Ｌ子（年長女児）が使いたい道具を探しているが、見つからない。保育者に一緒に探してもらう。スコップ（小）とバケツ、ふるいを持ってきて、砂をバケツにふるいながら入れる㉔。 Ｍ子（年長女児）が来た時に、保育者から「お水を使うときは、裸足になりましょうね」と声を掛けられたが、Ｍ子は聞こえてない様子だった。 Ｍ子はＬ子の隣に座り、スコップで砂をふるいに入れて手伝う。Ｍ子は砂をすくって、ふるいに入れ、Ｌ子は砂をふるって作り、バケツにいれている。それぞれに役割がある㉕。

表②－9 は、泥団子作りの過程の一部分である。㉔からは、初めから泥団子作りをすると決めて、道具を選んでいることが分かる。ふるいを選んだのは、ふるいで細かい粒子の砂を選別し、泥団子を作りたいという、明確な目的があったためと推察できる。㉕では、特に言葉のやり取りはないまま、2 人で役割分担をしながら、泥団子の泥を作っていた。事前に話し合っていたかのように、自然と役割分担ができていた。日頃から一緒に、泥団子作りをしている友達同士という、背景があると考える。

砂場遊びの道具であるふるいは、遊びの目的が明確であればとても便利で、色々な遊びに使うことができ

る。また、子どもが経験を積み重ねると、より上手に使うことができる。

表②－10「チョコレート貝殻」
＜7 月 1 日(水)晴れ時々曇り＞

事　例
M子（年長女児）とＬ子（年長女児）が、オレンジ型の型抜きをした上に、貝殻を飾っている。 Ｌ子「かいがらあげる」。 M子「ちょこれーとかいがらみたい」㉖。

表②－10 の㉖は、「型抜き遊び」の場面である。M子とＬ子は、一緒に遊ぶことが多い。砂場の砂に含まれる貝殻は、砂場遊びの中のままごとなどで頻繁に使われる材料であり、この遊びでも貝殻をチョコレートに見立てて遊んでいる。一緒に遊ぶ子ども同士が同じ感覚で砂と自然物を使い、「見立て遊び」をしている。

子ども達が「ままごと遊び」において、砂を食べ物の材料に見立てたり、使っているおもちゃや遊んでいる内容を、別のものや遊びに見立てたりすることは、頻繁に見られる。

③砂や泥そのものの遊び
表③－1「泥作り」
＜7 月 15 日（水）曇り＞

事　例
Ｌ子（年長女児）は泥がやわらかすぎたためか、丸めようとしていた団子をバケツに戻す。さらに、砂を手ですくって、バケツの中に入れていた。泥を団子状にしながら、手で水分を絞り出し、その団子に砂をかけ始める㉗。 M子（年長女児）は砂場の外の園庭から砂を拾ってきてボウルに入れ、混ぜ合わせる。同じ行為を 2 回、繰り返す㉘。 Ｌ子は、団子を固めながら丸めていたが、虫が飛んできて、怖くてその場を離れる。その時、手で作った団子は壊れてしまったようだ。再び、バケツの中の泥をこね始めたが、どんどん砂を入れ、バケツすりきれ一杯の砂にして固めている。「こんなになっちゃった」、「これで、どろだんごつくる」と言い、丸め始めるが、また虫が飛んできて、逃げる時に団子を落としてしまう。虫が飛んできて怖いということを、訴えてきた。 Ｌ子はバケツをひっくり返して、少し固まった泥にエノコログサを挿して、遊ぶ㉙。

表③－1 では、初めから泥団子作りをすると決めて始めている、砂場での遊びである。㉗と㉘では、泥団子作りをする過程で、泥の水分を絞ることで調整したり、状態の違う砂を加えたりすることで、泥団子に適した泥の水分量や、泥の状態になるように工夫している。経験があるからこその行動であり、状態の違う砂を試して、さらに、違う泥団子の作り方を模索していることが分かる。しかし、㉙のように、泥団子作りをしている過程でも、計画通りにいかないことが発生すると、遊びの変更が起こることもある。別の遊びに転換し、固まる砂を活用したのである。砂だからこそ、応用ができる遊びができるのだろう。

砂場遊びにおいて、水を使うと頻繁に発生する遊びが「泥遊び」である。初めから、泥を使って遊ぶと決めている子どももいれば、遊びの途中で泥遊びを始める子どももいる。砂場での泥遊びは、砂の状態や水の加減、遊び方の変化に対応することができ、子ども達も砂が変化することを利用して、遊びの中に取り入れながら楽しむことができる。

表③－2「泥遊び」
＜7 月 21 日(火)曇り時々晴れ時々雨＞

事　例
Ｂ男（年中男児）がじょうろに水を入れて戻ってきて、砂を入れた水入れの容器の中に注ぐ。G男（年中男児）は水入れの容器から溢れている泥を、バケツに入れようとしている。じょうろの水がなくなると、砂をすくって容器に入れ始める。砂が入らなくなると、砂を投げたり、容器に指を突っ込んだりしている㉚。Ｂ男が水を汲みに行く。G男もじょうろを持って水を汲みに行く。
Ｂ男がバケツの方に水を入れ、泥をこね回したり叩いたりして、ペタペタとした感触を確かめている㉛。砂場の外からサラサラの砂を運んできて、バケツと容器の中に入れてはこねている。バケツの泥の真ん中に穴をあけ、漏斗型のおもちゃを指し、砂場の外からサラサラの砂を持ってきて、入れる。

表③－2 は、砂場遊びの途中で「泥遊び」が始まった場面である。㉚は初め、Ｂ男は砂に穴を掘ったり型抜き遊びをしたりしていたが、G男が水入れの容器を持ってきたことで「泥遊び」が始まった。水入れの容器に砂を入れ、水を流し込むことで泥になる過程を見たり、泥が溢れたことでバケツに入れ替えてさらに砂を入れてみたりしながら、泥の変化を楽しんでいる。㉛では、泥のこね方も慣れた手つきで、手首をひねらせているということは、泥の作り方や扱い方の経験が多いからだろうと推察する。

砂場で子ども達は、砂に水を加えたり、砂を足したりすることで、泥が変化していることに興味を持ち、遊びを発展させながら楽しんでいる。

表③－3「埋め合いっこ」
＜7月1日(水)晴れ時々曇り＞

事　例
N子（年長女児）、O子（年長女児）、P子（年長女児）の３人で、裸足になったQ子の足を砂の中に埋めて、大笑いしながら遊ぶ㉜。

表③－3 の㉜の遊びの発端は、裸足になって砂場に来た 4 人の子ども達のうち、1 人が自分の足を砂に埋め始めたことに、他の 3 人が興味を持ったのである。埋められているQ子も、埋めている他の子ども達も大笑いしている。この場面では、1 人で埋める遊びが、4 人で一緒に埋める遊びへと発展している。

砂場で子ども達は裸足になって遊んだり、手で砂をすくって遊んだりすることが多い。そのため、裸足になった時、自分の足や手、あるいは友達の足を埋める遊びが発生することがある。また、砂場の中におもちゃを埋める遊びもある。

表③－4「おもちゃ埋め」
＜7月21日(火)曇り時々晴れ時々雨＞

事　例
G男（年中男児）がやって来て、B男（年中男児）の周りをうろうろした後、水入れの容器を持って来て、横で埋めようとするが埋まらない。B男が「ねえ、これつかう？」と大量のスコップを指して聞く。G男は、スコップを持って来て１回だけ掘り、あとは手で砂をかきだして、容器を半分ほど埋める。時々、スコップですくって埋める。容器を固定すると、スコップで砂を入れ始める㉝

表③－4 は、砂場遊びに来たすぐの子ども達の様子である。まだはっきり、どの様な遊びをしたいか分からない、という気持ちの段階であり、最終的には、「泥遊び」に至っている。㉝では、泥を作る前に砂を入れるための容器を埋めている。容器に砂を入れる時、入れやすいように、予め、砂に容器を埋めて固定している。手とスコップを交互に使うことで、砂の入れ方やすくい方を考えながら、工夫している姿が見られる。固定する時も、手を使って砂を少しずつかぶせることで、砂の量を加減している。

子ども達が、砂の状態や砂の量を観察しながら遊ぶことは、他の砂場遊びでも行っている。このように、経験を重ねながら、砂場遊びの方法を身に付けていることが分かる。

表③－5「砂入れ」
＜7月1日(水)晴れ時々曇り＞

事　例
G男（年中男児）とF男（年中男児）が２人で水入れの容器に漏斗型のおもちゃを指し、スコップ(小)を使って、砂を入れている。G男が「はいれはいれはいれ」と言いながらスコップで押さえている。F男は砂をすくって漏斗型のおもちゃに入れている㉞。

表③－5 の㉞では、口の小さな水入れの容器に、砂を入れるため、漏斗型のおもちゃを使っている。容器の中にたくさんの砂を入れるには、漏斗型のおもちゃが最適であると、判断したと考えられる。G男もF男も、以前から、漏斗型のおもちゃを頻繁に使っており、おもちゃの性質を理解していることが推察できる。2 人とも満面の笑みで、自然と役割分担をしながら、楽しんでいる。日ごろから仲の良い友達同士だからであろう。「入れ」と言いながら、漏斗型のおもちゃに入っていく砂を、スコップで押さえる行為は、少しでも早く砂が容器に入るだろうと考え、工夫している。

漏斗型のおもちゃは、砂や水を容器に入れる時に使ったり、川遊びの装置の１つとして利用したりして、砂場遊びの中で頻繁に使われていることが分かる。

表③－6「漏斗型のおもちゃを使って」
＜7月21日(火)曇り時々晴れ時々雨＞

事　例
B男（年中男児）が戻ってくると、漏斗型のおもちゃを持って来て、水入れの容器に挿し、そこから水を流し、水の流れる様子を見ている㉟。

表③－6 の㉟では、B男は砂と水の両方を入れる遊びには、漏斗型のおもちゃが使いやすいことを、理解していることが分かる。

様々なおもちゃを使うことで、使い方や特徴を理解し、さらに応用した使い方ができるようになる。

表③－7　「友達との泥団子づくり」
＜7月15日（水）曇り＞

事　例
L子（年長女児）はなかなかふるいの砂が、ふるえないため、ふるいを片付けて、直接スコップでバケツに砂を入れ始めた。「どろだんご」と言いながら、砂をバケツに入れている。よく見ると、バケツにはすでに水が入っていた㊱。
L子はバケツの中の泥を手ですくい、泥の状態を確認し、団子を作り始める㊲。 M子（年長女児）も砂と泥を交互にボウルに入れ、かき混ぜながら配合している。また、砂場の砂を掘りながら、湿った砂をすくっていた㊲。

表③－7 の子ども達は、初めから「泥団子作り」をすると決めて遊び始めていた。㊱から分かるように、観察を始めた時にはすでに、バケツの中に水を運んでいたことから、泥団子遊びをすると決めて、砂場遊びをしていることが分かる。㊲では、状態の異なる砂や、砂と水を混ぜることで、泥団子に適した泥作りをしている。その過程も、砂場の砂や砂場以外の砂の状態を観察し、泥団子に適した砂を求め、試行錯誤しながら遊んでいる。

砂場遊びでは、作りたいものが崩れたり失敗したりしても、何度もやり直すことができる。その遊びの過程や繰り返す行為から、子ども達は好奇心を持ち、試行錯誤しながら遊びを進めていると考えられる。「泥団子作り」では、砂の状態を理解することと、砂と水の配分を考えることが必要であり、何度も経験することで上手になる。

表③－8　「貝殻集め」
＜7 月 2 日（木）晴れ＞

事　例
Ｌ男（年中男児）が砂場で貝殻拾いをしながら「かいがらあつめ、たのしいな」と言うと、Ｇ男（年中男児）も貝殻拾いを始める。「きれいなかいがらある」と言って 2 人で見せ合っている㊳。 Ｇ男は、拾った貝殻を鍋に入れた砂の上にのせていると、Ｂ男（年中男児）のボール遊びの方に行き、一緒にボールを日除けの下から、突き始める。しかし、すぐに鍋の所に戻って、スコップで砂を入れることを再開する㊴。

表③－8 のＧ男は、他の友達の遊びに興味を持ちながらも、「貝殻遊び」に戻っている。㊳では、友達の言葉に影響を受け一緒に貝殻を拾い、お互いに見せ合っている。ここから、貝殻の種類がたくさんあることを知り、自分の好きな貝殻拾いをしたい、という気持ちになっていると推察できる。㊴では、拾った貝殻を鍋に入れて砂と混ぜている。これは、貝殻を使って他の遊びに活用したいと考えたためであろう。また、貝殻を鍋の中に入れる行為は、他のものに見立てて遊びたい、という思いに基づくものであると考える。

砂場の砂には、貝殻がたくさん混じっている。子ども達は砂場で、自然物の一部としての貝殻を使って遊ぶことがある。「貝殻遊び」として、貝殻を拾い集め、貝殻の色や形の違いを見つけたり、ままごと遊びの装飾などとして、使ったりして、遊びに取り入れている。貝殻などを使って遊ぶ時は、「ごっこ遊び」の飾りなどに利用して遊ぶことが多い。砂場にある貝殻は、形も色もバラバラで、探せば探すほど、たくさんの種類のものが見つかる。それらを、子ども達が遊びに使いたいと考えていることが分かる。

Ⅲ．総合考察

Ｉ幼稚園での子どもの砂場遊びの観察における、実際の遊びの種類や内容について、表を通して遊びの目的や意味を考察した。

①のダイナミックな遊びでは、長い時間をかけて遊ぶ子ども同士の、関係性の深まりや、砂場遊びの発展を見ることで、それらの遊びをする目的を確認することができた。砂場でダイナミックに山や川を作る中で、友達とのかかわりを深めたり、砂の変化する状態を発見し、遊びに取り入れたりすることで、砂場遊びの楽しさを味わい、心身共に充実した時間を過ごすことができている。また、どの事例においても、砂場での「山作り」などの遊びでは、比較的、長い時間をかけて砂の状態の変化に気付き、その砂の状態を活用することで、遊びを発展させていることが分かる。

②でのままごと系の遊びでは、砂場の道具や自然物を利用して遊びに取り入れたり、想像力を豊かにして、ままごと遊びや見立て遊びをしたりして、砂場の中で生活を再現する目的を持ち、さらなる砂場遊びへの興味や関心につながる意味を、見出すことができた。どの遊びでも経験の有無が、影響していると考えられる。特に型抜きなどを成功した場合は、大きな喜びや達成感を感じている。他方、失敗の繰り返しを積み重ねる過程で、型抜きなどの方法を何度も経験し、砂の性質や変化を知り、探求心が芽生え、砂場遊びをさらに楽しくしたいという欲求が生まれていることが分かる。あるいは、ごっこ遊びなどは、実際の生活における観察や経験を、遊びの中で再現することで、家族の役割などを自ら、経験していることが分かる。ふるいなどの砂場の道具は、遊びの目的が明確であればとても便利で、色々な遊びに使うことができる。さらに子どもが経験を積み重ねると、より上手に使うことができ、「ままごと遊び」などにおいて、砂を食べ物の材料に見立てたり、使っているおもちゃや遊んでいる内容を、別のものや遊びに見立てたりする姿が頻繁に見られ、生活の再現を楽しんでいることが分かる。

③の砂や泥そのものの遊びについては、砂場特有の遊びの内容で、砂や泥の変化を意図的に遊びに取り入れるという目的のもと、自然の仕組みや砂や泥の性質を理解できることを確認できた。砂場での泥遊びは、砂の状態や水の加減、遊び方の変化に対応することができ、子ども達も砂が変化することを利用して、遊びの中に取り入れながら楽しむことができる。砂場で子ども達は、砂に水を加えたり、砂を足したりすることで、砂から泥に変化していることに興味を持ち、遊びを発展させながら楽しんでいる。子ども達が、砂の状態や砂の量を観察しながら遊ぶことは、他の砂場遊び

でも行っている。また砂は、作りたいものが崩れたり失敗したりしても、何度もやり直すことができる性質を持っている。「泥団子作り」などでは、砂の状態を理解することと、砂と水の配分を考えることが必要であり、何度も経験することで上手になる。子ども達はその性質を理解しながら遊びの過程や繰り返す行為から、好奇心を持ち、試行錯誤しながら遊びを進めていると考えられる。

本研究では、①のダイナミックな遊びと②のままごと系の遊び、③の砂や泥そのものの遊びについて、それぞれ表ごとに分けて記載しているが、実際には混在している部分もあるため、以下の表Ⅲ―１で整理する。

表Ⅲ―１　①②③の遊びと表について

分　類	表
③のみ	表③－5「砂入れ」
②と③の混在	表②－1「ボウル型の型抜き」 表②－2「食べ物の型抜き」 表②－4「料理作り」 表②－5「おうちごっこ」 表②－6「ごはんやさん」 表②－7「砂をいろいろなものにふるう」 表②－8「ふるい遊び」 表②－9「泥団子作りのための砂ふるい」 表②－10「チョコレート貝殻」 表③－1「泥作り」 表③－2「泥遊び」 表③－7「友達との泥団子作り」 表③－8「貝殻集め」
①と③の混在	表①－1「川作り」「ダム作り」 表①－2「川作り」 表①－3「穴掘り」 表③－3「埋め合いっこ」 表③－4「おもちゃ埋め」 表③－6「漏斗型のおもちゃを使って」
①と②と③の混在	表①－4「落とし穴」「穴掘り」 表②－3「山作りに型抜き」

上記の表Ⅲ―1 を見ても分かるように、①のみの事例と②のみの事例、①と②の混在した事例はなく、ほとんどの砂場遊びで、①のダイナミックな遊びと②のままごと系の遊び、③の砂や泥そのものの遊びが混在していることが分かる。特にすべての事例において、③の砂や泥そのものの遊びが含まれており、砂場遊びでは砂や泥の遊びは切り離せないものであり、砂の状態を理解しながら、遊びに取り入れていることが示唆される。

砂場遊びをする中で、試行錯誤しながら遊んだりすることが、好奇心や探求心を育んでいる意味を持っていることも明らかになった。

本研究の中で砂場遊びの事例をふまえて、子ども達は、多種多様な経験を積み、想像力と創造性を育み、広げることができていることが確かめられた。砂場での子ども達の遊びは自由であり、砂という変幻自在な性質を理解しながら、答えを出して遊んでいるというよりも、遊びの過程で変化させたり、その変化を楽しんだりすることで、砂場遊びが様々な遊びに発展していたことが分かる。それだけ、砂場遊びが子どもにとって重要であることが確認できた。

子どもの遊びは、保育者側からの指示による活動ではない自由な発想に基づく活動であり、個人の趣向で行われる活動である。砂場遊びの分類をすることで、保育者として、それぞれの遊びに取り組む子どもの特徴をより的確に理解し、砂場以外での遊びの特徴や興味関心の方向性を把握できるようになることで、幼児理解が深まると考える。

Ⅳ．引用・参考文献

Caillois・R（多田道太郎他訳）『遊びと人間』講談社、1990 年。
笠間浩幸「子どもの遊び環境としての〈砂場〉－砂遊びから見る子どもの発達と〈砂場〉の役割－」『環境教育研究』第１巻第１号、1998 年、113-124 頁。
笠間浩幸『砂場と子ども』東洋館出版社、2001 年。
粕谷亘正「砂にかかわる幼児の遊びの構造とその理解」『保育学研究』第 45 巻第１号、2007 年、34-41 頁。
Carvey・C（髙橋たまき訳）「『ごっこの構造』―子どもの遊びの世界―」『サイエンス社』、1980 年。
佐藤郁哉『フィールドワーク　書を持って街へ出よう』新曜社、1992 年。
福西権太郎「幼稚園における遊びの再考－「砂遊び」の解釈学的アプローチ（Ⅲ）－」『京都文教短期大学研究紀要』第 38 号、2005 年、57-68 頁。
Fulghum・R（池央耿訳）『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』河出書房新社、1990 年。
Huizinga・J（里見元一郎訳）『ホモ・ルーデンス－文化のもつ遊びの要素についてのある定義づけの試み』講談社、2018 年。
宮内洋『体験と経験のフィールドワーク』北大路書房、2005 年。